[連載]

技術教育研究会と私の歩み

⑮

佐々木　　享

専修大学勤務の時代の教育実践

私は1966年4月から1976年3月まで専修大学に勤務しており、ここが私の教育実践の場であった。一般教育の化学担当の教師として雇われたが、後に自然科学論担当となった。その関係で、前回紹介した「自然科学書誌解題」を担当もした。また、菅井準一先生に代わり産業科学技術史という講義ももった。しかし基本は一般教育担当だからゼミはもたなかった。いずれにせよ、教育学関係の講義をしたことはなかった。

ところがある年度から、いわゆる大学改革の一環として一般教育担当の者も原則として3年生対象のゼミナールをもつことになった。私も「日本資本主義と科学・技術」なるテーマでゼミを開講した。私が所属していたのは経営学部だが、経済学部や商学部の学生も集まってきた。掲げたテーマは名ばかりで、「と科学・技術」にまで話は及ばず、ゼミの実態は日本資本主義発達史だった。昨今のようにゼミの内容のシラバスを公表していたわけでもないのに、私のゼミの実態は学部長の耳に入り、そんなことをやっているなら学部の専門ゼミにしろと言われてしまった。かくの如く融通無碍なところが私学の利点で、私は翌年から専門ゼミを開講し、一般教育ゼミは1年間限りで終わった。

ゼミ生の選抜は学生の手で

そんな次第で、専修大学時代は第3、4学年を対象に日本資本主義発達史ゼミを開講していた。経営学部にはいわゆる近代経済学の教員が多く、日本資本主義論とか日本資本主義発達史を学ぶ機会が少なかったので、学生は毎年たくさん集まった。ゼミとなると多くても1学年10名程度が限度だから、希望者の中から選抜せざるを得ないはめになった。私の場合は、1、2学年の成績ではなく、勉強する意欲の有無だけを問うこととし、指定した『岩波新書』の感想文を提出させ（この段階で希望者は半減する）、それを参考資料として面接を実施した。第2年目には、ゼミ生にも応募論文を読ませ、面接の場にも同席させてみたところ、1名の狂いもなく私の評価とゼミ生の評価が一致した。以後私はゼミ生を全面的に信頼し、その努力をかって、選抜は基本的に彼らに任すこととした。

毎週『岩波新書』を読ませる

ゼミでは種々な試みをした。学生たちがあまり本を読まないようなので、ゼミのテーマとは別に、毎週1冊ずつ指定して『岩波新書』を読ませてその感想文を提出させたこともある。年間20冊以上読んだと記憶する。この過程で『岩波新書』には絶版になっているものが少なくないことも知った。この方式には音をあげる学生もいたがおおむね好評で、楽しみにしている学生も多かった。結局音をあげたのは、毎週膨大な感想文を読まされる私の方で、たしか3年ほどで中止した。外から強制されなくても自分たちで読めばよいと言ったのだが、このときのゼミ生の不満には驚き、それならゼミの密度を高めようということになった。

日本資本主義発達史ゼミ

ゼミ生、とくに4年生は下級生を指導しなければならないという意識が強いらしく、私が驚くほどよく勉強した。『広辞苑』を引く習慣をつけるよう教えたら、全員がゼミに持ち込んで来るだけでなく、ゼミの新入生に早速に買わせるという具合だった。

ゼミの基本的なテーマだから、『日本資本主義発達史』という題名のものをはじめいろいろな書物を読んだ。明治維新理解の重要性を説き、関連する『岩波新書』を何冊か読んだこともある。石井さんの『明治維新の舞台裏』初版の面白さを知ったのもこのときだ（改稿された再版ではその面白さが半減している）。遠山茂樹さんの『明治維新と現代』で飽きたらなくなって岩波全書の『明治維新』も読んだ。学生たちは、きちんと指導すれば、緻密な論理を追うことが要求されるこの種の書物を読みこなすことを改めて教えられた。このときだったか、下山三郎さんの『明治維新史研究史論』は歯ごたえがある本だとうっかり口を滑らせたところ、それをやろうという学生がいて、取りあげるはめになった。私のゼミ生は日本資本主義論の講義を聴いているわけではない。そのうえこの書物を理解するにはマルクス、エンゲルスの古典の素養が要求されると私は考えていた。実際に学界の評判もそうだった。私にいくらか理解できたのは、学生時代に阿部好蔵先生の指導でマルクスの『ルイボナパルトのブルメール18日』などをみっちり読んだし、同じく西洋史演習で三好洋子先生からイギリスの地代論を学習したことがあったからである。そんなわけでテキストにしたことはなかったものだった。しかし始めてみると、いちいち概念くだきに時間がかかるけれども、ゼミ生の半分くらいは結構読みこなすことに驚かされた。

私のゼミ生が日本経済史のインターカレッジゼミに参加している話を聞いたのは、この時期だったかも知れない。どういうツテでこのインカレゼミを知ったのか記憶にないが、東大、一橋などの日本経済史ゼミの学生たちと交流している話がゼミ生の口からこぼれた。対等になにがしかの論点を議論しているとのことなので、私にはこの方面の著作はほとんどないのだから行くなとも言えず、恥をかいた次第だった。

卒業論文を書く

必修ではないし、単位増になるわけでもないが、卒業論文を書いてみないかと提案したのも、毎週『岩波新書』を読むのを止めた頃と記憶する。実際にはゼミ生のほとんど全員が書くようになった。卒業論文も論文という以上は学界に新しい知見を提供するものでなくてはいけない、などと厳しいことを言ったのだが、書かせてみると、なかなかおもしろいものが提出された。いま流行のダブルスクールでパテントアカデミーという各種学校に通っていた学生の工業所有権に関するものなどは、本格的な論文だった。

史料と資料の違いについても話をし、史料を使って本格的な論文を書くことも教えた。某研究所と防衛庁の防衛研修所に埋もれていた国家総動員関係の史料を使ったら面白い論文が書けるなどと話をしたら、史料を読み込んで論文を書くことがおもしろくなり、卒業してから半年後にやっと大論文を提出した学生があった。この学生K君は、卒論執筆でお世話になった研究所にその後しばらくアルバイトとして働いていた（私としては、研究者はそろそろ修士以上になり始めた時代だから無理ではないかと思っていた）が、やがて一人前の研究者として成長した。修士、博士の研究者を部下とする研究者となった彼に再会したのは、私が名古屋大学に勤務するようになってからだ。最近佐々木さんの教え子と称している人に逢ったよ、と天野郁夫氏が教えてくれたのがきっかけだった。（つづく）